

10月23日
報告

「第15回 中国人受難者を追悼し 平和と友好を祈念する集い」報告

杉原 達

10月23日（日）、「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」が、安芸太田町中国電力安野発電所そばの小高い丘にある「安野 中国人受難之碑」前で開催された。

第1回の「集い」の開催は、碑が建立され除幕式が行われた2010年10月であった。2011～12年は5月と10月に訪日団が来訪したので「集い」が年2回開かれた。以後、年1回の開催となり、今秋で15回目を数えたことになる。

当日は、昼すぎまで晴天に恵まれたが、午後1時半から始まった「集い」の途中から雲が広がり風も強くなってややきびしい天候となるものの、無事に終了することができた。周辺は山と川に囲まれ、のどかな風景が広がる。紅葉が鮮やかに色づいており、庭先の柿の木がたわわに実っていたのが印象的だった。太田川水系には、戦前に建設された発電所は安野を含めてあわせて8つあり、現在はさらに増えて日々稼働している。

「集い」は、岡原美知子さんの司会のもとで黙祷から始まった。主催者である継承する会の足立修一世話人代表の挨拶のあとの来賓の挨拶を、断片的ではあるが紹介しておきたい。

まず安野中国人受難者遺族からは、「歴史をふりかえり、受難者を追悼し、碑文を心に刻んで、歴史を繰り返さないために、私たちは両国の人びとの友誼を深める努力をしなければなりません」と痛切なメッセージが届けられた。安芸太田町の橋本博明町長からは、「ロシアによるウクライナ侵攻」の中で、地域から世界へと平和の実現を強く訴える挨拶をいただいた（小野直敏副町長代読）。地元・



善福寺の藤井慧心住職は、「よき未来に繋がる日中友好を願い、交流を深める場所であり続けるためにも、追悼しつつ安野の歴史を継承し伝えていかなければ」と強調された。広教組の頼信直枝委員長は、戦火の報道が続く今日、日本国憲法から幾つかの条文を紹介された後「私たちはここに立ちきらないといけない。甚大な加害と被害をうみ出した悲惨な歴史を繰り返さないために。大きな力に個人の尊厳を押しつぶさせないために」と決意を語られた。中国駐大阪総領事館の薛劍総領事からのメッセージでは、国交正常化50周年を迎えた今、なお厳しい諸課題に直面しているけれども「引越しのできない隣国として、平和友好が両国関係の唯一の正しい選択肢です」との指摘が胸に残った。

挨拶が終わり、竹内ふみのさんが二胡で「陽関三疊」を演奏された。そのあと献花へと進み、参列者全員が「燕になりたい」という二胡の曲の音色に、時おり鳥や虫の鳴き声がまじる雰囲気の中で献花を終えた。今年は広島県外からの参加者がやや多いように見受けられた。献花の列に中国電力の職員の方が加わっておられたのが印象的であった。

「集い」終了後、参加者の多くが善福寺へ移動して追悼法要に臨んだ。藤井住職の「阿弥陀経」の朗々たる読経の流れの中、例年通り中国式と日本式の焼香をゆっくりとささげた。善福寺には、安野で亡くなった中国人のうち5人の遺骨を、三代前の住職が預かって保管された経緯がある（遺骨は1958年の送還運動の中で天津に帰国）。こうした歴史は、とくに和解後に善福寺を訪れた中国人受難者・遺族の心のわだかまりを解いていくうえで深い意味をもつことになった。藤井住職は、



2017年に天津で行われた追悼法要についても、パネルを用いて説明をされた。その後、安野に連行された中国人が強いられた労働と生活を身近に見聞きしていた栗栖薫さんが当時の状況について語られた。まさに歴史の証人である。最後に、法要全体の司会をされた川原洋子さんが「歴史の継承はむずかしいことですが、その中で記念碑と善福寺の存在はとても大きいものだと思います」と締めくくられた。このむすびの言葉に、なるほどと腑に落ちる思いがした。

碑の周辺で、なつかしい出会いや新しい出会いを経験できたのも、「集い」のおかげである。梶谷俊造さんは、小学校4年生のときに中国人が坪野にやってきたことを今でも覚えているという。梶谷さんは、和解成立後、記念碑建立に向けて、善福寺との連絡や吉村石材店の紹介などを通じて、和解事業の開始に道をつけてくださった方である。

かつて軽トラを運転しゴム長をはいた普段着のスタイルで、坪野周辺を案内して下さったことが忘れられない。この日も「米寿が近いんじゃない」と気さくに笑っておられた。聞けばお孫さんが関西の大学を卒業後、被爆問題などに関わる平和運動に参加しておられる由、そのことを話す梶谷さんの顔はやわらかくうれしそうだった。いつかお孫さんと一緒に碑を見に来られるといいなと思った。

小島フサ子さんには、今回初めてお会いした。戦時下の五日市のお生まれで、3歳のときに父親が中国戦線で戦病死されたという。戦後長く東京・神奈川にお住まいだったが、近年故郷に戻られたとのこと。3年前、新聞に掲載された記事で記念碑のことを知って、足が不自由な中、甥御さんの車で碑を見に来られたそうだ。友人の方々に向けても安野の取組みを積極的に発信し共有されている。事実を知りたいという真っ直ぐな強い意志と行動力に、強く胸を打たれた。お二人のお話を聞いた後で、地域の歴史、日本と中国のつながり、若い世代へ期待することなどを、もっと聞いてみたいという気持ちが強くなった。碑の前での「集い」は、そうした会話の継続を保障する大切な現場なのだ。

コロナ禍以前には、発電所の上にある貯水槽にのぼり、周辺を見下ろしながら説明を聞いて強制労働に想いをはせるフィールドワークが毎回行われてきたが、今回も実現できなかったのは残念だった。来年の再開を願うばかりだ。

今年は、広島市民と中国側との共同調査が初めて行われた1992年から30年目にあたる。地道な活動の蓄積の上で「和解」の意味も深まってきたのだと思う。参加者一人ひとりに歴史と未来への視点を改めて問いかける「集い」であった。